

幕末維新期の「興讓館」と「開成学校」の教育精神 —儒学による人格主義教育と洋学による科学技術教育—

Educational spirit of “Kojokan” and “Kaisei School” during the Meiji Restoration: personalist education by Confucianism and science and technology education by Western studies

土井 進

長野保健医療大学大学院・非常勤講師

要旨:「興讓館」と「開成学校」の校名には、高邁な教育精神が込められている。両校の名称の由来は、どちらも四書五経の一つである『大学』と『易経』である。「興讓館」は『大学』の「讓」(思いやりの徳)を中心とし、「開成学校」は『易経』の「開物成務」、すなわち「人間性を開拓し、人としての務めを成す」ことを中心としている。「興讓館」には、人格主義教育が脈打っており、「開成学校」には「開物成務」の哲学による科学技術教育が、脈打っていた。米沢藩興讓館を創設した上杉鷹山は、学識・功業・徳行を体現した細井平洲を尾張藩から招聘して師事した。備中西江原に一橋家の有志により設立された郷校興讓館の館長となった碩学阪谷朗蘆は、渋沢栄一と意気投合するところがあった。「開成学校」は、幕府の開成所を明治政府が発展させたもので、全国の各藩校から選抜された最優秀の学生(貢進生)が学んだ。その中に穂積陳重、杉浦重剛、小村寿太郎などがいた。

キーワード: 興讓館、開成学校、高田豊寿

ABSTRACT: The names of the clan schools “Kojokan” and “Kaisei School” contained a high-ranking educational spirit. In other words, the origin of the clan school “Kojokan”, which produced talented human resources of each clan during the Meiji Restoration, was “Great Learning”, and the origin of “Kaisei school” was “I Ching”. “Kaisei School” produced human resources who contributed to the Edo Shogunate and the Meiji government through modern learning. Personalist education that values “modesty” was pulsing in “Kojokan”, and science and technology education based on the philosophy of “enlightenment and accomplishment” was pulsing in “Kaisei School”. Uesugi Youzan, who founded the Yonezawa Domain Kojokan, invited Hosoi Heishu, who embodied scholarship, achievements, and deeds, from the Owari Domain to study. Sakatani Rōro, who became the director of the “Kojokan High School” which was established by volunteers from the Hitotsubashi family in Bichu Nishiehara, had a chance to get in touch with Eiichi Shibusawa. “Kaisei School” was a development of the Kaisei Sho, which was a research and education institution for Dutch studies and Western studies in the Shogunate, and it was inherited by the Meiji government. Among the tribute students, the talented ones went on to “Kaisei School” including Hatoyama Kazuo, Hozumi Nobushige, Sugiura Shigetake, Komura Jutaro, and Kabuto Kuninori. Verbeck contributed as the vice-principal of “Kaisei School”.

Key words: Kojokan, Kaisei School, Takada Hojyu

1. 研究の背景と目的

筆者は、教師としての資質能力^{ついちんたんれん}の^{たかだほうじゅ}槌砧鍛錬を目的として、高田豊寿先生^{しゅうらい}(¹)が主宰された「周禮研究会」(²)に約120回通って学んだ。「周禮研究

会」は高田先生の生前に約1,200回開催され、その中で1985(昭和60)年6月26日の第970回、同11月26日の第1,000回、1986(昭和61)年2月26日の第1,018回、そして、同8月26日の第1,047回において、高田先生は「興讓館と開成学校」について講義された。この4回の講義に出席し、「興讓館と開成学校」についてきちんと論文にまとめる重要性を自覚しつつも、研究成果

を具体的な形に仕上げるができないまま今日に至った。

この度、長野保健医療大学紀要第7号に投稿する機会を与えられたことに感謝し、幕末維新期における「興譲館と開成学校」の教育はどのように行われたか。また、学生たちの志の立て方はどのようなものであり、教育内容・方法はどのようなものであったかを明らかにすることによって、「興譲館と開成学校」の教育精神を究明することを本研究の目的としている。

2. 幕末期に全国に存在した6つの「興譲館」、その前身と後身の教育施設

幕末期において各藩は、自藩の改革発展に貢献できる有能な人材を養成するために、藩校という藩立の公立学校を建て、藩士の英才教育に力を注いだ。藩校は寛政（1789-1801）年間にその数を増し、幕末の天保（1830-1844）年間には全国的に設立され、年代の明確なものだけでも、江戸時代には223校⁽³⁾が設立されている。

「興譲館」を藩校・郷校⁽⁴⁾の名称としたものは、表1のように6校あり、全国各地で特色ある教育活動が展開された。明治政府が中央集権国家

をつくるために「廃藩置県」を断行したことにより、1871（明治4）年に6つの興譲館は閉校・廃校となった。

6つの「興譲館」の前身と後身の教育施設は、表2の通りである。

表2の「興譲館」の前身の教育施設の欄から分かるように、1868（明治元）年に創立された荻野山中藩藩校「興譲館」に、前身の教育施設があったかどうかは不明である。しかし、他の5つの「興譲館」には、すべて前身の教育施設が存在していたことが分かる。

「興譲館」の前身の教育施設の呼称は、「学問所」「文武稽古所」「教諭所」「武芸稽古所」「鳴鳳館」「桜溪塾」となっている。ここに見られる呼称は、文徳を重視するものと武徳を重視するもの、そして文武両道を重視したものに分けることができる。また、「鳴鳳館」と「桜溪塾」は、学び舎の環境が景勝の地であることから名づけられたものと考えられ、文武のどちらが重視されていたかは定かではない。いずれにせよ、これらの名称には教育内容である「文」と「武」が示されているだけで、教育哲学や教育精神が明らかではない。

幕末期になると藩財政の窮乏、外圧に対処す

表1 幕末期の藩校・郷校「興譲館」

名称	開設場所	開設年	閉校年、廃藩置県
米沢藩藩校「興譲館」	山形県米沢市	1776（安永5）	1871（明治4）
小城藩藩校「興譲館」	佐賀県小城市	1787（天明7）	1871（明治4）
甲斐谷村郷学「興譲館」	山梨県都留市	1842（天保13）	1871（明治4）
徳山藩藩校「興譲館」	山口県周南市	1852（嘉永5）	1871（明治4）
備中西江原藩郷校「興譲館」	岡山県井原市	1853（嘉永6）	1872 半官半民の私学
荻野山中藩藩校「興譲館」	神奈川県厚木市	1868（明治元）	1872（明治5）廃校

表2 6つの「興譲館」の前身と後身の教育施設

藩名	「興譲館」の前身の教育施設	「興譲館」の後身の教育施設
米沢藩	学問所（1697・元禄10）	山形県立米沢興譲館高等学校（1956）
小城藩	文武稽古所（1784・天明8）	佐賀県小城市立桜岡小学校
甲斐谷村藩	教諭所（郷学）（1842・天保13）	山梨県立都留興譲館高等学校（2013） 都留市立谷村第一小学校
徳山藩	武芸稽古所（1744・延享元）藩校「鳴鳳館」（1785・天明5）	山口県周南市立徳山小学校
備中西江原一橋家領内	私塾「桜溪塾」塾長 阪谷朗蘆（1851・嘉永4）	学校法人興譲館・興譲館高等学校 1948（昭和23）
荻野山中藩		神奈川県厚木市立荻野小学校

る人材の養成などが主な要因となり、各藩において自分の藩を改革していく有能な指導者を輩出することが、藩校教育の重要な課題となった。その藩校改革のシンボルとなるのが新たな校名の設定であった。いかなる教育哲学に基づき、いかなる教育精神を標榜する藩校名にするかが重要であった。この課題を担って命名された「興讓館」には、四書五経の一つ『大学』の哲学が裏づけられている。一家仁にして、一国仁に興る。一家讓にして一国讓に興る、という教育哲学に基づいて藩の興隆をめざそうとしたことがうかがえる。次に「興讓館」の名称の由来と教育精神について考察する。

3. 「興讓館」の出典『大学』⁽⁵⁾の 人格主義教育

手習いを中心とした庶民のための初等教育機関である寺子屋は、幕末期には全国で15,560校⁽⁶⁾あったといわれる。また、経済的実力を背景に、社会的地位を高めてきた町人に対して、忠、孝、知足安分、正直、堪忍、儉約などの町人道德を説いた石門心学の講舎⁽⁷⁾は、幕末期には全国に2百有余あった、といわれる。しかし、このような庶民の教育ではなく、藩政改革の一環に位置づけられた藩校教育の改革には、教育哲学の裏付けがあり、教育精神を鮮明に打ち出すことが重要であった。このような観点から孔子の遺書であり、「徳に入るの門」とされている『大学』が着目された。『大学』は、儒学の原典である四書五経の筆頭に位置している。『大学』は、次の10章から成り、人格主義教育の階梯について述べている。1. 明德、2. 新民、3. 止於至善、4. 本末、5. 格物致知、6. 誠意、7. 正心・修身、8. 修身・齐家、9. 齐家・治国、10. 治国・平天下。このうち第9章が「興讓館」の出典となっている。「いわゆる国を治むるには、必ず先ずその家を斉^{とと}うとは、その家を教うべからずして、能く人を教える者、之なし。故に君子は家を出ずして、教えを国に成す。孝は、君に事^{つか}えるゆえんなり。弟は長に事^{こうこう}えるゆえんなり。慈は衆を使うゆえんなり。康誥に曰く、「赤子を保^{やす}んずるが如し。」と。心に誠^{まこと}にこれを求むれば、中らずといえども遠からず。いまだ子を養うことを学んでのち

に嫁するもの有らざるなり。

一家仁にして、一国仁に興る。一家讓にして一国讓に興る。一人貪^{たんねん}戾^{れい}なれば、一国乱^{らん}を作す。その機かくの如し。これ一言事を慎^{やぶ}り、一人国を定むという。』

一藩の万民は、皆それぞれの一家を住まいとする住民である。この一家が仁の心を持ち、慈しみの心を持てば、一国が仁に興り、藩全体が興隆する。一家が讓の心を持てば、それは藩全体に及ぶ。財政難に困窮している藩も、藩主一人の行いから始めて住民全体に及ぼせば、藩政改革を成し遂げることができる。一人が藩を興し、一人が藩を乱す。興讓館には、一人の可能性を徹底して尊重し、一人一人の主体性を引き出す教育哲学と教育精神が込められているものといえよう。

4. 細井平洲（1728-1801）と上杉鷹山 （1751-1822）による「興讓館」教育

宇和島藩（愛媛県）出身で近代法学の先駆者、開成学校に学んだ穂積陳重は、細井平洲を評して次のように述べている。「余思えらく、学識深淵・功業隆盛なる者といえども、徳行のこれに伴うにあらざれば、未だこれを真儒と称すべからず。学有りて徳無き者は、儒は則ち儒なりといえども、小人の儒なり。未だこれに許すに君子の儒をもつてすべからず。学識徳行兼ね具わり、加えるに功業の顕著なるを以てする先生のごとき者にして、始めて君子の儒と称することを得べきなり。」⁽⁸⁾

このような学識・功業・徳行を体現した細井平洲を、尾張藩から招聘して師事したのが米沢藩の上杉鷹山であった。鷹山の名は上杉治憲、鷹山はその号で、後継者がいなかった藩主上杉家へ日向高鍋藩主（宮崎県）秋月家から養子に入った。

平洲と鷹山の最初の出会いは、1764（明和元）年、平洲37歳、鷹山14歳の時であった。この時に平洲は『大学』の第1章を講義している。1767（明和4）年、鷹山は17歳で家督を相続し、第9代藩主となるや「受け継ぎて 国の司の身となれば 忘るまじきは 民の父母」と詠んでいる。ここに鷹山の藩政改革への深い覚悟が示

されているとともに、謙虚で真摯な人格が躍如としている。

再会は1771（明和7）年で、この時平洲は自筆で「学則」を扁額に認めた。その一節に、「善を見てはこれに従い、義を聞きては則ち服し、溫柔孝悌にして、驕りて力を持つことなく、志に邪なく、行いは必ず正直」⁽⁹⁾であるべきことを説いている。

1776（安永5）年、鷹山は学館を設立し、平洲がこれを藩校興譲館と命名した。興譲館の教育精神について、平洲は「建学大意」に次のように述べている。「仁譲にのっとり人を有徳君子と称し、この仁譲にそむける人を不祥小人という也。徳は遜譲より美なるはなし。美德は仁者の所行なり。驕慢より悪なるはなし。悪徳は不仁者の所行なり。興譲館と名付けしこと、美德を修し悪徳を除せんがためなり。」⁽¹⁰⁾平洲は、「譲」の心、思いやりの心が、人間としての最良の美德であり、このような美德を備えた人材を輩出することを興譲館教育の精神として打ち立てたのである。

平洲の3度目の米沢訪問は1796（寛政8）年であった。このとき69歳の師平洲を迎えるために46歳の藩主鷹山は米沢郊外まで出迎えて、旅の疲れをねぎらっている。鷹山は平洲の教育精神をもって、一生涯を貫き、窮乏を窮めていた藩財政を一代で立て直し、名君と謳われた。平洲と鷹山は、終生変わらぬ師弟の交わりを貫いた。

5. 阪谷朗蘆（1822-1881）と渋沢栄一（1840-1931）による「興譲館」教育

阪谷朗蘆は備中国の生まれで、名は素、朗蘆はその号である。私塾桜溪村塾塾長としての学徳の誉れが高く、1853（嘉永6）年、一橋家の有志により代官所に郷校興譲館が設立されると、阪谷朗蘆が懇請されて初代館長に迎えられた。阪谷はこの時から一橋家に仕官して、15年間館長を務めた。

一方、1864（元治元）年に一橋慶喜に仕えることになった渋沢栄一に与えられた任務は、一橋家の領地であった備中西江原村に出向いて農兵を募集することであった。1865（元治2）年に

西江原に到着した渋沢が、真っ先に出会った人物が興譲館館長阪谷朗蘆であった。渋沢は四書五経の一つ『論語』を生涯の一書として愛読し、儒教哲学を経済活動の基盤としていたので、儒学の碩学、興譲館館長阪谷朗蘆とはたちまちにして意気投合するところがあった。

阪谷は儒学者であったが断固として開国主義を貫き、渋沢がそれに反対する攘夷論を主張しても、説を曲げることはなかった。真に先見の明のある朗蘆は、王者の風格に満ちた人格者であった。二人は胸襟を開いて語り合うことによって、お互いが相手の人間力の偉大さ、学徳の深さを駢と確認した。この出会いがあったから後年、阪谷は息子の阪谷芳郎（後の東京市長）の嫁として、渋沢の娘を迎えている。また、阪谷は興譲館の扁額の揮毫を渋沢に依頼した。渋沢の手に成る風格に満ちた「興譲館」の額が、今日も学校法人興譲館・興譲館高等学校の校門に掲げられている

儒学者阪谷朗蘆の教育哲学、教育内容・方法、教育精神はどのようなものであったか。阪谷は儒学を大成した朱熹を信奉していた。そのため開校当初から朱熹が教育精神として掲げていた「白鹿洞書院揭示」を校是とした。毎朝、子弟と共に講堂に集まって朝礼を行い、次の「白鹿洞書院揭示」⁽¹¹⁾を一同で唱えてからその日の課業に入った。

- 一、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり
- 一、博くこれを学び、審かにこれを問い、謹んでこれを思い、明らかにこれを感じ、篤くこれを行う。
- 一、言は忠信、行いは篤敬、忿を懲らし慾を窒ぎ、善に遷り過ちを改む。
- 一、その義を正してその利を謀らず。その道を明かにしてその功を計らず。
- 一、己の欲せざる所は人に施すなかれ。行いて得ざることあれば、諸を己に反り求む。

学校法人興譲館・興譲館高等学校においては、創立以来約160年にわたって「白鹿洞書院揭示」が同校の教育精神の根幹を貫く伝承の校訓として引き継がれている。

6. 阪谷朗蘆の感化をうけ 42 年間 Y 校横浜商業学校長を務めた三沢進⁽¹²⁾ (1849-1923)

三沢進は 1849 (嘉永 2) 年、備中国手^{てのしょう}庄村三沢に醸酒業を営んでいた大庄屋の子どもとして生まれた。名を進に改めたのは、東京に遊学してから後のことである。1862 (文久 2) 年 14 歳にして阪谷朗蘆の興讓館に入り、阪谷が 1868 (明治元) 年に興讓館長を辞するまでの 6 年間、彼の感化を受けることによって人格の基礎を形成したといわれる。1871 (明治 4) 年 23 歳のとき、興讓館の塾生活を終えると、1872 (明治 5) 年 4 月、故郷を出奔東京に出た。1875 (明治 8) 年慶應義塾に入り、1878 (明治 11) 年慶應義塾を卒業して直ちに三菱商業学校の英語教師として奉職した。慶應義塾時代の三沢について、同窓の鎌田栄吉は衆に秀でて学業に専心し、また志操の堅固なこと、品行の方正なること、一点の非も指摘すべき所のない人物であったと述べている。

1882 (明治 15) 年、34 歳にして横浜商法学校長に任ぜられ、次いで Y 校横浜商業学校長として、42 年間商業教育に尽くした。1897 (明治 30) 年、校訓十か条を制定し、これを教官と生徒に繰り返し朗読させた。十か条とは①正直、②勉励、③正確、④緻密、⑤整頓、⑥精察、⑦機敏、⑧謹慎、⑨耐忍、⑩注意である。三沢が興讓館の生徒時代に阪谷朗蘆とともに朗読した「白鹿洞書院揭示」を髣髴とさせるものがある。

阪谷芳郎は、三沢は Y 校の校長として実践躬行自ら範を示し、生徒に教えるに誠意懇切をもってした。授業は実用を主として、身体は健康を重んじ、処世の要は常に紀律を守り正直を旨とすることであったので、同校の出身者はいずれの方面に採用されても人に愛され、身を誤ることがなかったと述べている。

7. 江戸幕府・明治政府の洋学研究教育機関「開成所」「開成学校」の校名の変遷

「興讓館」は藩校であり藩内の藩士が学ぶ公立学校の性格をもった教育機関であったのに対し、「開成所」「開成学校」は江戸幕府の、後に明治政府の洋学研究教育機関であり、はじめは幕臣のみの入学であったが、のち諸藩士も入学が許

され、官立学校の性格を有していた。「開成学校」は、江戸幕府による蘭学や洋学の研究教育機関であった「開成所」を、明治政府が受け継いで発展させたもので、表 3. のように名称は目まぐるしく変遷した。

江戸幕府による洋学研究教育機関「開成所」は、「蕃書和解御用」に始まり、次いで「洋学所」「蕃書調所」「洋書調所」と改称され、さらに組織を拡充して「開成所」と命名された。蘭・英・仏・独・露などの外国語と自然科学・兵学など 8 学科からなる総合的教育機関となった。教授陣にはオランダに留学して法学や経済学を学んだ西周のほか、神田孝平、加藤弘などがいた。

8. 「開成所」「開成学校」の校名の由来

藩校名は藩政改革の重要な一環として、校名に教育哲学や教育精神が表れるように、四書五経の哲学から引用されることが多かった。「開成所」「開成学校」も同様で、「蕃書」とか「洋学」という教育内容に基づく校名ではなく、江戸幕府が開設する洋学研究教育機関がめざす教育哲学や教育精神が明らかになるように改名することが求められた。この要請に応じてつけられた校名は、四書五経の一つ『易経』に基づいた「開成」であった。

開成は開物成務の略で、『易経』の繫辭上傳第 11 章にある。「子曰く、夫れ易は、何^{なんす}為る者ぞ。夫れ易は、物を開き務めを成し、天下の道^{おほ}を冒ふ。斯くの如きのみなる者なり。是の故に、聖人は以て天下の志に通じ、以て天下の業を定め、以て天下の疑ひを断ず、と。」すなわち、「先生 (孔子) が言われるには、そもそも易とは何のために作られたものなのか」といって、そもそも易というものは、天下万物の未だ覆蔵していて知られていない物事を開き示し、天下万物のそうあるべき事態を成就させるものであり、天下万物のかくあるべき道を網羅し、覆いつくしているものである。まったく、そういうもの以外のものではないのである。だから聖人は易を用いて、知られざるものを明らかに、あるべきものをあるべきように成し遂げさせて、天下万民のそうありたいと思う気持ちに通ずるのである。そのようにして、天下万民の成すべきわざを安定さ

表3 「開成所」「開成学校」の校名の変遷

学校名	開設年	事 項
蕃書和解御用	1811 (文化8)	幕府天文台、蘭書の翻訳
洋学所	1855 (安政2)	軍事力強化のため老中・阿部正弘によって、江戸の九段坂下竹本図書頭屋敷に設立。
蕃書調所	1857 (安政4)	神田小川町に創立、幕府が設立した洋学研究機関兼外交書翻訳局。生徒数は100人ほどで、授業科目は、最初は蘭学だけだったが、英・独・仏の教育も加わった。化学・器械・物産・画学 ⁽¹³⁾ ・数学・西洋印刷術などの科目も加わる。
洋書調所	1862 (文久2)	一橋に移る
開成所	1863 (文久3)	一ツ橋門外の護持院原の広大な建物に移転し、開成所という名称が新たに採用された。江戸幕府滅亡により一時閉鎖。
開成学校	1868 (明治1)	江戸幕府の「開成所」を明治政府が接収して「開成学校」となる。
大学南校	1869 (明治2)	明治政府の援助で開成学校、昌平学校、医学校が合併して大学南校となる。お雇い教師フルベッキ各藩学校から選抜された優秀な貢進生が入学。
南校	1870 (明治3)	
第1大学区第1番中学	1871 (明治4)	お雇い教師：グリフィス (化学)
開成学校	1872 (明治5)	明治5年8月に「学制」頒布
	1873 (明治6)	明治天皇が行幸。開成学校様式 ⁽¹⁴⁾ と呼ばれた洋風校舎は、松本開智学校等のお手本となった。貢進生の中の秀才が選抜されて開成学校に進学。
東京開成学校	1874 (明治7)	専門学校に昇格した。初代校長 畠山義成
東京大学	1877 (明治10)	

せるのである。そのようにして天下万民の疑い迷うことがらを判断し決定するのである。」⁽¹⁵⁾

上述の内容は、3点から成っている。「開物^{ことわり}は、物事の理が未だ明確になっていないことから、その理を開き、示すこと。」「成務は、成すべきことがら、責務を達成すること。」「天下の道を冒うとは、万物の志に通じ、天下の務めを成せば、その道は以て天下を覆冒すべきを言うなり。」以上の3点に分けて説明された『易経』の教育哲学と教育精神は、「開成所」「開成学校」の進むべき道を明快に指し示していると言えよう。開物と成務によって世の中に必要な万般を尽くそうとする壮大な社会貢献の精神が漲っている。ここに「開成所」「開成学校」の教育精神が簡潔明瞭に開示されたといえよう。幕末期において日本人が知らなかった西洋の科学技術に関する知識を解明し、日本人が成し遂げたいと願う西洋の文物についての知識をいち早く吸収して、こうという進取敢行の教育精神が遺憾なく表現されていると考える。

9. 「開成学校」のお雇い外国人教師フルベッキに学んだ学生の志の高さ

オランダ人フルベッキ⁽¹⁶⁾ Verbeek (1830-1898) は、1859 (安政6) 年に長崎に來日した。1864 (元治元) 年、幕府直轄学校である長崎奉行所の^{せい}済美館に招かれ、さらに1866 (慶應2) 年には佐賀藩の致遠館にも出講するようになった。1869 (明治2) 年に新政府から顧問として招かれ、大学南校の英語及び学術教師、後に開成学校の教頭となった。

フルベッキの教えを求めて各地から長崎や佐賀に集まった俊秀は、大隈重信、副島種臣、江藤新平、大木喬任、伊藤博文、大久保利通、加藤弘之、辻新次などであった。フルベッキは、西洋の知識に飢えた日本の青年たちの真摯に学ぼうとする志の高さに圧倒され、教育という仕事に専念するようになった。彼は日本及び日本人をこよなく愛した。日本の風土と日本人の国民性にひかれ、ほぼ40年にわたって日本に住み、永眠した。彼が教育に熱情を傾けたのも、教えを受けに來た青年たちの高い志と礼儀正しさに感動したからであった。

フルベッキと親交のあった高橋是清は、『高橋

是清自伝』(1936)において次のように述べている。「フルベッキ先生は、当時文部省の顧問、開成学校の教頭として、随分顕職の人にも知己が多かった。高位高官の人達が外国の事情を知りたいと思ふ時には、先ずフルベッキ先生を訪ねて教えを乞ふた。就中、加藤弘之、辻新次、杉孫三郎などといふ人々は、しばしばやって来て、先生の教えを受けた」⁽¹⁷⁾と。

10. 各藩校から「大学南校」に入学し、「開成学校」に進学した貢進生⁽¹⁸⁾

貢進生とは、明治政府が国家的な観点からのエリートを養成するために、1870(明治3)年に各藩校から選抜した最優秀の学生(16歳～21、22歳)のことである。全国の藩から310名選拔され、大学南校に入学させられた。しかし、翌年の廃藩置県により貢進生制度は1871(明治4)年に廃止され、貢進生はすべて退学を命じられた。彼等は学校制度の目まぐるしい変遷の波にもまれ、その中から秀才だけが更に選拔されて1873(明治6)年に開成学校に入学を許可された。

彼等が学んだ洋学、すなわち西洋日新の実学は、英語・仏語・独語などの外国語と科学技術、工学などであった。

藩校時代における人材養成は、自己の藩のためであるから、人材を幕府に出すということにはなかった。しかし、明治政府は近代的な統一国家を築くためにたくさんの優秀な人材を必要とした。そこで各藩の秀才を選んで東京の大学南校に入学させ、切磋琢磨させることによって国家的な人材を養成しようとしたのである。これが貢進生であった。

各藩校において儒学中心の教育精神を学んできた貢進生が、「開成学校」において心機一転、洋学中心の教育精神を学び、日本の近代化の推進者として活躍するに至ったのである。先ず日本の科学技術、工業界の近代化の推進者となって活躍した貢進生の代表例は、表4の通りである。

次に、日本の法曹界、教育界の近代化に貢献した貢進生の代表例は、表5の通りである。

儒学の研鑽によって難しい漢文を読みこなす学力を身に付けていた貢進生たちは、今度は「開成学校」において英語・仏語・独語などの外国

表4 日本の科学技術、工業界の近代化に貢献した貢進生

貢進生	出身藩	都道府県	職 業
松井直吉	大垣藩	岐阜県	化学研究の開拓者、理科大学長
久原躬弦	津山藩	岡山県	化学界の功労者、東京大学教授
村岡範為馳	鳥取藩	鳥取県	X線の最初の実験者
関谷清景	大垣藩	岐阜県	地震学に貢献、理科大学教授
松村任三	松岡藩	茨城県	植物学の開拓者、理科大学教授
和田維四郎	小浜藩	福井県	鉱業界の先駆者、東京大学教授
小藤文次郎	津和野藩	島根県	地震学の父、東京大学教授
古市公威	姫路藩	兵庫県	工業界の開拓者、工科大学長
原口 要	島原藩	長崎県	我が国の鉄道界に貢献

表5 日本の法曹界・教育界の近代化に貢献した貢進生

貢進生	出身藩	都道府県	職 業
鳩山和夫	真島藩	岡山県	法曹界、政界で活躍
小村寿太郎	飫肥藩	宮崎県	外務大臣
伊沢修二	高遠藩	長野県	明治教育の開拓者
加太邦憲	桑名藩	三重県	大阪控訴院長
杉浦重剛	膳所藩	滋賀県	明治大正の典型的教師像
小林有也	伯太藩	大阪府	長野県教育界の功労者
岸本辰雄	鳥取藩	鳥取県	明治法律学校の設立者
穂積陳重	宇和島藩	愛媛県	近代法学の先駆者
木下広次	熊本藩	熊本県	初代京都帝国大学長

語の習得に全力を尽くし、その語学力を基にして近代的な科学技術や法律等の知識を修得していった。彼等の学問に対する真剣な学びの姿勢と、明治時代の近代国家建設に尽くそうとした志の高さはいかばかりであったろうか。感嘆あるのみである。

11. まとめ

幕末維新期の激動の時代に、各藩の有為な人材を輩出した「興譲館」、そして幕府と明治政府に近代的な学問を通して貢献した人材を輩出した「開成学校」には、その源に共通する高邁な教育精神があったといわなければならない。すなわち、「興譲館」の淵源は『大学』であり、「開成学校」の淵源は『易経』である。両校には、四書五経に基づく「譲」を重んずる人格主義教育と「開物成務」の哲学に基づく科学技術教育が、不動の教育精神となって脈打っていた。

廃藩置県、学制頒布、そして戦後の教育改革の激動を乗り越えて、両校は、公立小学校、県立興譲館高等学校、学校法人興譲館高等学校として蘇生している。また、「開成学校」は東京大学となって大きな使命を果たしている。「源遠ければ流れ長し」といわれるが、両校は益々有能な人材を輩出し続けている。

なお、筆者はわずか2年間ではあったが、信州大学教育学部校内に「信大 YOU 遊興譲館」開設したことについて、(注19)に記した。

注・引用文献

- (1) 筆者は、^{げんかく} 懇意な指導を求めて1981年～1988年までの8年間、高田豊寿先生(1912-1989)に師事し、^{けいがい} 嚆矢に接した。高田先生は昭和天皇の侍従次長を務めた木下道雄先生(1887-1974)の抱持をされたあと、埼玉県の慈恩寺で水野梅暁師のもとで修業された。その学問は該博であり数学、英語、仏教、儒教、経済学、法学、教育学等に通暁されていた。先生は、教師の要件は「声」と「腰(姿勢)」と「足(フットワーク)」であると常々語られた。また、「教育」という仕事は「聖職」である。何故なら「聖」という漢字は2つに分けると、「耳 + 呈」となる。児童生徒の声に「耳」を「呈」する

聖職であると説明された。たくさんの蔵書は東京富士大学に寄贈された。

- (2) 「周礼研究会」の開催場所は皇居和田倉門、学士会館、東京駅八重洲口、池袋勤労福祉会館、都内の弟子宅、千葉県沼南町にあった先生のご自宅などであった。「周禮研究会」の名称は、第1回の勉強会が1971(昭和46)年に東京の西神田で開催され、その時に使用されたテキストが中国の13経の一つ『周禮』であったことに由来する。
- (3) 唐澤富太郎(1968)『図説 明治百年の児童史』上、講談社、p.88
- (4) 郷校は、郷学、郷学校ともよばれる。藩校(藩学校)が藩士の人材養成機関であったのに対して、郷校は藩士のためのものと庶民のためのものとの2種類があった。前者は藩校のない遠隔の地に住む藩士の養成のためであり、後者は民間の有志によって経営され、庶民の教育に当たった。幕末に多く現れた郷校は明治以後の小学校発足の重要な基盤となった。明治時代になってから設立された郷校興譲館として、1869(明治2)年の犬山藩(愛知県)と1870(明治3)年の忍藩(埼玉県)がある。『藩史大事典』全8巻、1989、雄山閣
- (5) 簡野道明(1971)『学庸章句』明治書院、pp.14-15
- (6) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』解説、ぎょうせい、p.230
- (7) 唐澤富太郎(1968)『日本教育史』誠文等新光社、pp.176-179
- (8) 高瀬代次郎編(1920)『平洲全集』全、平洲会蔵版、p.2
- (9) 後藤三郎(1937)『日本教育家文庫第27巻 細井平洲』北海出版社、p.48
- (10) 細井平洲著、中村幸彦校注(1972)『嚆鳴館遺草』岩波書店、pp.18-19
- (11) 「白鹿洞書院掲示」<https://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/rekisi-siryu/07101-07200/07147ochiai-souseki-gokyou/07147ochiai-souseki-gokyou.htm> (2021年10月19日参照)
- (12) 唐澤富太郎(1984)「三沢進一42年間商業教育に尽くした典型的教育者一」唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典』中、ぎょうせい、pp.586-587
- (13) 画学は、写真の技術が普及していなかった幕末においては、図画の力量が重視され、開成学校や沼津兵学校の重要なカリキュラムに位置付けられていた。
- (14) 唐澤富太郎(1967)「開成学校様式の学校」『図説 近代百年の教育』国土社、pp.68-69
- (15) 今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一著(2008)『易

- 経』下，新釈漢文大系 63，明治書院，pp.1504-1505
- (16) 中野善達（1984）「フルベッキ―近代日本建設の水先案内人―」唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典』上，ぎょうせい，pp.579-581
- (17) 『高橋是清自伝』上，中公文庫，p.150
- (18) 貢進生制度を建議した一人である平田東助は，米沢藩藩校興譲館に学び，明治2年藩命によって大学南校に学んだ。後に桂太郎内閣の農商務大臣，内務大臣を務めた。貢進生制度について『平田東助自叙伝』の中で「新日本建設の棟梁偉材を輩出して東洋文化の焼點となり，世界の文明に参贊するに至りたる東京帝国大学（医科農科を除き）が實に南校の後身にして，大学教育の根軸たる人物が皆南校時代の貢進生たりしを想えば予は何となく壮快の感に堪えず」と述べている。唐澤富太郎（1974）『貢進生―幕末維新期のエリート―』ぎょうせい，p.5，p.10
- (19) 土井進編著（2010）「最新の興譲館」『周禮 15 講―「先生」の教育―』信州大学教育学部，pp.71-75 <https://core.ac.uk/download/pdf/148767303.pdf> 信大 YOU 遊興譲館，2021 年 10 月 4 日参照

筆者は，信州大学教育学部キャンパス内にあった附属長野小学校の移転跡地に，物置となっていた校舎の一部を学部への許可を得て借り受け，長野県教育委員会，長野市教育委員会の公認の下，2002 年 3 月に「中間教室」を開設し，「信大 YOU 遊興譲館」と命名した。この興譲館は，信州大学大学院教育学研究科心理教育相談室として整備されることに伴い，2003 年 11 月に閉鎖された。この 2 年間に 10 名の中学生が登校し，24 名の学生が授業の空き時間に交代で指導に当たった。毎朝の『論語』の朗読，漢字練習，読書，武道場での稽古，サッカー，サツマイモ栽培，調理実習，清掃活動などがカリキュラムであった。10 名の不登校生は，様々な学生と関わり，着実に社会力を回復し高等学校に進学した。